

[原著論文]

下田歌子と内蒙古の近代女子教育について
－内蒙古カラチン右旗毓正女学堂の設立を中心に－

包 賀喜格図*

**Shimoda Utako and Contemporary Women Education in Inner
Mongolia**
－Centered around the Establishment of the Yuzheng Female
School in Harqin Right Banner of Inner Mongolia－

Hexigetü BAO*

Abstract

Yuzheng Female School was one of the educational reforms by Zasake Prince Gongsangnuoerbu of Harqin Right Banner of Inner Mongolia and it marked the beginning of contemporary women education in Inner Mongolia. The paper aims to clarify how Japan influenced China educationally at the end of the Meiji Government by exploring the educational thoughts of the famous Japanese female educationalist Shimoda Utako, her ideas on Chinese education and her relationship with Yuzheng Female School. The essence of Shimoda Utako's educational thoughts for women education was nationalism, which was based on her education in Confucius thoughts and her consciousness of respect for the emperor. Her never-changing thought was that education should serve the country. Guided by this kind of thought, she realized the importance of supporting and penetrating into Chinese education and thereby protecting China and ensuring the influence of Japan in China when the western imperialist countries, especially Russia, manifested great threat to Japan. The establishment of Yuzheng Female School was just the product of this thought, which manifested in the teaching goals and the design of curriculum and the later Chinese students of this school going to study in Japan. Yuzheng Female School was just one of the examples of Shimoda Utako's educational activities in China. It is of great use for us to assess Prince Gong's educational reform and educational modernization of Inner Mongolia more comprehensively to perceive the Yuzheng Female School from the perspective of educational background.

KEY WORDS : Shimoda Utako, Yuzheng Female School, nationalistic educational thought, mutual support theory for China and Japan, educational thoughts on China

1. はじめに

中国内蒙古の近代女子教育と言えば、清末内蒙古カラチン右旗親王貢桑諾爾布（以下は貢王にする）の近代教育改革——「貢王三学」(1)の中の「毓正女学堂」（1903年）が嚆矢とする。中国国内の毓正女学堂についての研究(2)は主に内蒙古或いは蒙古族の近代教育発展史の角度から、貢王の教育改革の内容の紹介と教育上の貢献を中心に行われてきた。日本側の研究(3)はその教育内容のほかに、学堂の設立した背景、特に20世紀初頭の日露戦争前の日本の対内蒙古政策の一面を明らかにしようとした。中国側の研究は「歴史的背景」の考察が足りないのが問題になる一方、日本側はもっぱら「政治的」な背景に注目し続けた傾向がある。毓正学堂の設立自体は教育活動であるから、当時の中日両方の教育環境や教育人物の参与についての分析も不可欠だと思う。本稿では、明治後期の女子教育のリーダーの位置にある下田歌子という人物の女子教育思想、対中国教育活動、毓正女学堂の成立との関係などを分析して、当時日本の対中国教育活動の一環として内モンゴルの近代女子教育の発足した内因を考えてみたい。

2. 下田歌子の女子教育思想と対中国教育観

下田歌子(4)は日本の近代女子教育の第一人者であると同時に、中国の近代女子教育事業に大きな影響を与えた人物でもある。下田は中国への女教師の派遣と日本国内における中国女子留学生の教育などを通して、中国近代女子教育の発展を援助した。その結果として、「事実、中国で女子中等教育を興した女性のほとんどが下田歌子の教え子であったし、「良妻賢母」が中国の女子中等教育の教育目標として定められたのも下田歌子の教え子たちによってであった」(5)という。内蒙古カラチン右旗の毓正女学堂も「実践女学校留学生部の支部」(6)と言われるほどその指導のもとにあったが、下田はなぜ中国（当時清国）の女子教育事業に強い関心を持っていたのか、その対中国教育観はどう理解したらいいのか、これらの疑問を解くことは、下田歌子と内蒙古の近代女子教育の成立との関係を究明することに大事な作業だと思う。

『下田歌子先生伝』の中に、「先生は既に夙く、宮中生活を拝辞される前後から、この隣邦支那問題に対しては並々ならぬ関心を持って居られた。それは先生が

当時から多く接触する機会があった伊藤公、井上候、大隈侯その他達識な政治家たちから、冥々のうちに受けた感化も相当にあったことを疑わぬが、先生が父祖三代儒学をもって鳴った家系から生い立たれたという、その幼時からの教養がまた一つには大なる原因を成していたのであろう」(7)と述べている。下田の中国への関心の理由は「政治家からの感化」と「儒学の薫陶」と、二つにあると見てもいいようだが、ここでは更なる分析、つまり政治家たちからの感化と儒学の薫陶が下田歌子にもたらした思想上の影響をそれぞれどう具体的に捉えたらよいか、という問題が出てくるのである。本稿において、前者からは日中提携論者、黄白人種対抗論者、後者からは皇室中心主義者と国家主義教育論者と、それぞれの因果関係が成立できると見ている。日中提携論、黄白人種対抗論は下田の対中国教育観に含まれるもので、皇室中心主義、国家主義教育論は下田のあらゆる教育活動の指導方針という存在で、その対中国教育観も言うまでもなくこれをもとに成立されたと思う。

1) 皇室中心主義者と国家主義教育論者としての 下田歌子

下田歌子は、その家系として、「実に父、祖父、曾祖父三代続いて、郷党及び天下に鳴らした文学の家、漢学者の立派な血筋を引いていた」(8)。このような家庭で育った下田は幼い頃から儒学の薫陶を受けていた。これについて、本人は1934（昭和9）年の『源氏物語講義 首巻』「緒言」の一節にこう語っている。「…幼年時代から深く和歌に興味をもっていた為に、勢ひ古文学に引きつけられて、「女の癖」と叱られつつも、家の蔵書は何くれとなく、手当たり次第に読過したけれども、何分自分の家は三代続きの漢学者であったので、漢籍は可なり蔵されてあったが、国書は余り沢山もなかった」(9)。漢籍の本を沢山読んだと同時に日本の和歌にも強い興味を持っていたことがわかるが、その心底の中国への親しみと日本の伝統への重視はこの頃からすでに芽生えているだろう。

下田歌子の父は尊王思想の持主であった。父から尊王思想を受け継いだことについて、下田はこう語っていた。「自分はどうも通常の婦人とは違った性格を有つている、(中略)既に少女時代にも父の正義の為に、苦心惨憺せる状況を目撃し、また屢屢父と共に生死の間を往来したこともあったので、自分は子供の時から君国の精神を養成せられたからです」(10)。また、

「君国のこと」と「一個人のこと」、どちらが大事なのかについて、下田は「(前略)如何なる逆境に立つても、それらは一個人のことであるから、自分ひとり我慢すればよいので、何ら苦痛を覚えませんか、夜も快く安眠出来て、(中略)ところが一度君国のことに思い至ると、夜も碌碌眠られず、熱狂興奮して気狂いになりそうです」(11)と語っている。下田の一生の軌跡を見れば、確かに儒学教養の延長戦に「君国」は何より大事な存在で、君国の成立がその一切の活動の原点となった。

日本近代の国家主義教育方針は1890年の『教育勅語』の発布によって正式に定められたが、下田歌子の「儒学の子」「尊王思想の子」(12)という性格は当然彼女を国家主義教育思想の賛成者、執行者に規定するようになるのである。1893(明治26)年3月、下田は次のように、西洋と隣国清朝からの圧力の下での日本の富強の課題を意識して、女子の役割、或いは家庭教育の重要性を強調している。「一国の富強なるは個々の家の富めればなり。一国の貧弱なるは個々の家の貧しければなり。而して邦国の文明なるは個々の家の和氣あるが故にして、且つ善母は能く人類を新にして一国の体面を進ましむるを得べければ、婦人の任誠に至大至重なりと云ふべし。」(13)と、また1898(明治31)年10月の『帝国婦人協会設立の主旨』の冒頭に、下田はその一貫した国家主義の女子教育の方針を唱導している。「女性の資性は単純なり、慈仁なり、単純なるがゆえに能く其節を守ることを得、慈仁なるがゆえに能く其徳を全うすることを得。其淑徳高節の光輝や、能く一家の長幼を導きて、正理真福の門に入らしむべし。国は家の大なるもの、即ち国家てふ名称のある所以なるべし。故に一家の風儀を釐正するは、単へに女子の感化によらざるべからざるが如く、一国の風紀を善美ならしむるも、亦女子の感化(インフルエンス)を要せざるべからず。」と。

岡田照子(ほか)の研究(14)には、下田の女子教育理念として、第一に完全なる国民としての婦人をつくること、第二に人として完全なる人格を備えることを挙げている。またこの二点について、「完全なる国民としての婦人とは、愛国心にあふれ、慈愛、優美などの徳性を備え、妻として家庭のことにあたり、母として子供に対する知識、技能と健全なる体格をもっている女性であり、第二の人格は、人の人たる道を行う品性と考えていた。つまり女性がいかに、知力や技芸

に優れていても、思想が極めて過激的、急進的であっては国家の役に立たず、害毒を流すことになるので日本的に育て上げなければならないと考えていた」とまとめている。このまとめから分かるように、第一の「完全なる国民」にまず「愛国心」を強調しているのに対して、第二の「完全なる人格」にも「国家に役立つ」かどうか重点を置いている。下田の女子教育論は多くの学者から「国」と「男」のためのものだと評価されているが、「国」のためという判断自体はたしかにその通りだと思う。

2) 日中提携論者、黄白人種対抗論者としての

下田歌子の対中国教育観

下田歌子は早くから日本の皇后の傍近くに仕えて、明治新政権の中枢に近づいていて、知的環境に恵まれていた。国の貴顕とつきあう間に受けた日中提携論、黄白人種対抗論のような思想上の影響もその一つだと言えらる。

1893年9月、下田歌子は皇女教育調査という天皇の内旨をうけてヨーロッパに渡った。渡英中に日清開戦を聞いた下田は「兄弟の国たる日清」の両国の争いが、「東洋の隙を伺ひつつある」欧州列強に漁夫の利を占めさせると危機感を抱いていた(15)。

日清戦後、中国とどういう関係を持つべきかについては、下田歌子は近衛篤磨をはじめとする政治家たちの東亜保全論から大きな影響を受けた。近衛篤磨は1863年に五摂家筆頭近衛家長男として京都に生まれて、下田と同じように皇室と関係が近かった。漢学の師岩垣月洲からアジア主義の影響を受けて、1885年留学のため西洋へ行く途中、台湾海峡を通過する時、「隣国の地漸次ニ西人の蚕食スル所トナル」を見て、「対岸ノ火視シテ放却シテ可ナランヤ」と中国に対する同情心を表していた。(16)その後、荒尾精から寄贈された『対清弁妄』の影響で、中国分割の脅威とその予防策としての中国保全論がその東亜経綸の基本理念になった。

日清戦争の後、列強による中国分割の危機は深刻化した。特にロシアからの脅威に面して、近衛篤磨は1898(明治31)年に雑誌『太陽』に「同人種同盟 附支那問題研究の必要」という論説を発表した。「最後の運命は、黄白兩人種の競争にして、此競争の下には、支那人も、日本人も共に白人種の仇敵として認め

らるるの位地に立たむ」,「支那人民の存亡は、決して他人の休戚に非ずして、又日本人自身の利害に関するもの」であるので、中国を助けて「人種保護の策」を取らなければならないと述べている。そして、その具体的な行動として、同年11月2日に、近衛が中心となる（東亜会と同文会を合併した）東亜同文会、1900（明治33）年9月24日に国民同盟会、1903（明治36）年8月9日に対露同志会が設立され、「支那を保全す」という方針をもって、日本と中国で一連の活動を展開した。

近衛篤麿を代表とする東亜保全論は当時の主流思想となった。大隈重信、伊藤博文などの政治家たちも日清提携の点で一致した考えをもっていた。これで東亜保全論の下に日清提携が盛んに唱えられるが、下田歌子はまさにこの日清提携の女子教育面の唱導者であった。日清開戦を聞いた時の「兄弟の国たる日清」という言い方は近衛篤麿の西洋へ赴く途中の話とよく似ていて、下田の中国に対する親しみの感情が読み取れるが、このような個人的な感情が当時の国益と結合した時、日清提携、東亜保全という立場を選ぶのも不思議ではない。1901年、下田は辺見勇彦(17)との話の中にこう述べている。「(前略)自分の考えを正直にいへば、日本の興亡といふものは、結局対支問題を如何に処理していくかに在ると思ふ、日本と支那の有様を此の儘にして置くと、恐るべき結果に陥る。まづ具体的な第一着手としては、彼我新提携の前提として、お互いの人情、風俗、制度、文物をはっきりと認識しなければならぬ」(18)。このように、下田は日中提携と日本の存亡との関連から対中国教育援助の緊迫を意識していた。

下田歌子は近衛篤麿の黄白人種対抗論についても同調していた。1902年に下田の援助で上海に創立された『作新社』の発行した雑誌『大陸』の創刊号に下田の女子教育に対する見解が掲載されていた。中国留学生が下田歌子の演説をノートにしたものであるが、次の一節があった。「今日之世界。乃种族竞争之世界。优者胜而劣者败。强者存而弱者亡。五洲虽大。岂能容此弱劣之民族。并立于大地之上乎。缠足之不禁。吾其为支邦人种前途虑矣。大凡一国女学优者其男学必优。何也。母教斯使然也。一国女体强者其男体必强。何也。母种使然也。今日欧美白种。所以强盛如此者。曰唯有此故。亚洲黄种所以陞乎其后者。亦曰惜无此故。」下田はこの黄白人種の対抗関係を強調しながら、中国の

女性の人種的改善と教育の普及を力説したのである。

3. 下田歌子の対中国教育活動の展開と 毓正女学堂成立の経緯

1) 下田歌子の対中国教育活動とその国家主義的な性格

下田歌子は如何に中国の教育、特に女子教育に関心を持っているかについては、当時の政論家鶴崎鷺城氏の言、「人に對へば誰れ彼れの差別なく、隣邦支那の開発を説いた者に、男に近衛震山公、女子に下田歌子女史があつた」(19)という評価からよくわかると思う。

下田は日清戦争の時から既に中国の「女子を教導しよう」と考えていた(20)。でも、ヨーロッパから帰国した後の下田の「急務」は「女子教育の中等以下の階層への普及」であって、帝国婦人協会の設立とその下の実践女学校、女子工芸学校の創立に専念して、中国に対する教育活動の実質的な展開がなかった。

下田歌子の直接指導した対中国教育活動は日本国内と中国大陸、二つに分けられる。日本国内の活動は中国女子留学生の教育が中心で、1901年に始まって、1914年まで続いた。これに対して、中国大陸への教育活動の準備は義和団事件の頃から始まったのである。中国大陸の下田の指導した教育活動を簡単にまとめてみれば、1900年に、来訪の孫文に「二荒山、ふもとの雲にやどる夜も、夢路はまよふ、もろこしがはら」の歌を送って、改めて中国の前途に関心を示したのが起点で、このころから下田は中国留学生と積極的に交わった。同年、辺見勇彦に中国へ渡ることを勧めるのを機に、駁翼翠を家庭教師に誘って、中国語を勉強し始めた。一緒に習っていた人の中に、辺見勇彦、時任たけ子(辺見の姉)、中村芳子(のち肅親王家の女学堂に赴任)、内田薫などがいた(21)。そして1901年に、愛国婦人会の趣意書を起草し、発起人として同会の創立に参加した。また同年、実践女学校に初めての清国女子留学生を受け入れた。1902年、邊見は下田の援助で上海に作新社という出版社を創立した。作新社は雑誌『大陸』を発刊し、日本の書籍をたくさん翻訳出版した。同年9月、下田は横浜大同学校女教師の河原操子を上海務本女学堂に派遣した。河原操子は翌年12月に内蒙古カラチン王府の教師として入府し、12月28日に王妃とともに毓正女学堂を開設した。そして1904年、下田は中村芳子(実践女学校清国留学生

部の教師兼舎監)を北京の肅親王王府に派遣して、和育女学堂を設立した。

下田歌子の中国観には、中国に対する親愛の情と、女子教育を通して中国の近代教育に協力しようという意思が確かに存在したが、その活動を細かく見ると、裏の国家主義的性格も見えてくると思う。1900(明治33)年1月、下田は中国視察に行こうとする奥村五百子に「日の本のまことの種子を、もろこしの原にもうえよ、大和なでしこ」(22)という餞別の一首を送った。同年の孫文に送った歌には中国革命への期待を示したことに対して、奥村への歌にはさらに日本の力を中国大陸に浸透させようという意思がはっきりと表されている。

1904(明治37)年、下田歌子は中国人留学生銭豊保、陳彦安の實踐女子学園卒業式の告辞に「(前略)私共の肉体は離れていても、その精神は決して変わることはありませんまい。どうか貴嬢方も涙してこの日本の地と別れたことを忘れないように。貴嬢方を養った国は清国であっても、教を受けた国は日本であることをいつも念頭において下さるように」(23)と言っている。これは「下田は留学生教育を通じて、中国籍の「日本人」を大量に育成し、彼女たちを通じてアジアの女たちに対する日本の指導性の確立をねがったといっただけであろう」(24)。

2) 毓正学堂の成立した経緯

前述したように、下田歌子の中国における教育活動はその時間を見れば日露戦争前の何年間に一遍に展開されたことがわかる。毓正女学堂も1903年12月28日に設立されたのであるから、同じくこの特殊な時期の産物だと言える。なぜこの時期に蒙古奥地に近代的日本風の教育が成立されたのか、次には日本側を中心に、その設立の経緯のことは見てみたい。

日清戦後、欧州列強の中国分割がますます激しくなってきた。特にロシアの満州占領は日本にとって最大の危機となった。近衛篤磨などは東亜保全論を唱える同時に、対露同志会を組織して対外硬の論調を強く主張した。日本政府も対露戦争は避けられないものと見て、各種の力を動員して戦争の準備をしていた。日本にとって、満州におけるロシアとの対抗の中に、蒙古方面は重要な戦略地帯であって、対蒙古の裏面工作がどうしても必要になり、戦争勝敗にかかる要件となっ

た。この時内蒙古と日本とのつながりを作ろうとする人の中に、肅親王と川島浪速は中日両側の代表的な人物であった。

川島浪速はロシア勢力の満州に拡張しつつある形勢をみて、「蒙古方面から、何らか一種無形の壇壁を築き上げて、ロシアの中原侵入の鋒先を防止しなければならない」と思って、「そこでまず蒙古方面を精神的に占領すること、そして蒙古方面の実力を有する人々を親日主義に誘い込む」ことを計画した(25)。この目的を達成するために、川島は肅親王と親交を持ちながら、親王に頼まれた警務学堂の職を勤める間に、蒙古王公や活仏ラマ等と交際を結んだ。

日露間戦雲みなぎる一方の中、特にロシアも蒙古地方に浸透工作を急いでいる情勢の下、川島も日本の軍部も「蒙古地方に一小部分でも同情者を作ることが何よりも大事だ」と思っていた(26)。これで、1902年から1903年にかけて、川島浪速は日本駐清公使内田康哉、公使館附武官青木宜純陸軍大佐と「極秘のうち屢会合した」(27)。彼らが選んだのは内蒙古カラチン地方であった。

選んだ理由は二つあると思う。一つは地理上の考えで、「カラチンは熱河よりもなお遙かに北にあって、内蒙古を南北に貫く熱河大道の要衝に位置し、北へ進めば赤峰、洮南を経て、遠く齊々哈爾やハイラルにも達し、外蒙古からシベリヤの方にも通じているから、日本軍が露軍に対して、何か側面または背後的活動をしようとするれば、どうしてもカラチンを足だまりにすることが必要なのである」(28)。もう一つは、肅新王の王妹が貢王の王妃だということであった。

こうして、肅親王も日本の対内蒙古カラチン工作の重要な一環となった。肅親王は清朝大官の中の親日主義の人で、「中国はどうしても日本と緊密な提携を結ばなければ、自国を保全することも、東亜の大局を安定させることもできない」(29)という政見をもっていた。彼は東亜同文会会員の川島浪速と義兄弟の約をなして、二人は「一身同体の如くに働き、お互いに相助けていた」(30)。川島の他に、大隈重信と下田歌子とも親しい関係をもった。大隈について肅親王は「未だ一面の面識なしと雖も、書面の上で親交を訂し、常に師事している」(31)と言っている。肅親王は下田歌子とも「面識がないが、頗る親密な関係」(32)をもって

いた。石川半山が「東京と北京とを往復する間、幾度も女史と王の間に音信を取り次いだ」(33)ことから肅親王と下田歌子との間の緊密な交流が存在したことは裏付けられる。こういう東亜保全論、日清提携論における日本側との一貫性は肅親王が日本の対内モンゴ工作に協力した理由になるであろう。

当時、内モンゴへの武力占領が不可能である以上、川島の考案した「精神的な占領」が不二の選択になったであろう。「精神的な占領」には教育の浸透という便利な手段が当然日本の軍部や川島などの視野に入ってくるのである。

「貢王三学」の中に先に作られたのは崇正学堂であった。この学堂の章程や教授方法の草案に日本人の寺田亀之助と通訳の小池万平が参酌していた(34)。寺田亀之助は軍部の内命を受けて、1902年7月15日から12月16日まで蒙古視察をしたと、東京日日新聞の記事に掲載されている(35)が、この記載から日本軍部の内モンゴカラチン地方への教育浸透が1902年に既に始まったことがわかる。でも、崇正学堂の場合はただ学堂章程などの起草に参酌しただけで、日本人教習の派遣や日本式の教授法、教育内容などの導入がまだ実現できていないのである。「当時南北満州及び北韓方面其他外蒙古の庫倫地方には露国の軍事的動静を探るべき夫々の道が付いていたに拘らず、内モンゴ方面には未だ適当なる方法が講ぜられていなかった」(36)という実態から見ても、どうしても誰か日本人のカラチンへの進出が必要であった。

内モンゴのカラチン右旗に更なる教育浸透を図るために、日本の在北京外交側と軍部が苦心を重ねた。貢王も当時中国国内の「日本に学ぶ」風潮の中に、また肅親王の影響で早くから日本に渡り、日本の教育文化、工業などの建設事業を視察しようと計画していた。彼は「友人であった日本陸軍少将の中村愛三と日本駐北京大使陸軍少将の山根武亮と接見し、彼らを通じて日本政府にこの計画を提出した。日本駐清公使内田康哉の激請によって日本政府の許可がおり」(37)、1903年春、外モンゴカルカ親王那彦図の長子祺承武、肅親王の長子憲章、川島浪速らと、清政府の許可を得ずして極秘の微行で天津港から日本の郵船に乗って日本に渡った。

大阪で開かれた内国勸業博覧会を視察するのが貢王

来日の名目であった。日本の文化、産業の進歩、教育の発達を認識してもらうという日本側の目的もあったが、裏面の陸軍少将福島安正、女子教育者下田歌子などとの会見も計画の一つであった。福島と下田との会見によって、貢王は「軍備保持の必需を再認識し」、女子教育の重要性についても関心を引き起こされたのである。貢王は下田歌子の勧めによって、視察の際既に「自国にも一つの女学校を設けたいと御内意を漏らされていた」。そして、帰国の途中に内田康哉公使にも同じ考えを示したが、王府に帰った後王妃の意見を聞いて、王妃も大賛同であった。こうして1903年の夏、よく蒙古地方を探索していた佐々木安五郎(川島浪速の妹婿)がカラチンに来た時、王妃からは正式に佐々木に「王府の家庭教師として適当な日本婦人を傭聘したい」(38)と伝えた。北京公使館の公使や武官などがこれを聞いたとき、「全く空谷に跫音を思いをして喜んだのである」(39)。誰か内モンゴに入ると、名目は教師であるが、事実私設外交官、軍事上の秘密通信者の役割も果たせることで、ロシア方面の動静も容易に探知できるようになるということである。

河原操子は最適の人選であった。その理由としては確かに最前線にこのことを推進した川島浪速と同郷で、面識があることなどが挙げられるが、これよりもっと大事なのは「下田歌子の知遇」にあると思う。河原は下田と同じように儒学の家庭で育った。父親の河原忠は福島安正陸軍大将と幼馴染の親友で、「孔孟の学問の名家」という意識、また早くから中国を注目してきた福島安正の影響で、「日中親善説」と「教育尊重論」を常に説いていた(40)。これは下田歌子の教育思想と「日清提携論」と全く一致しているのである。父からの「感化」が河原の入蒙の思想上の準備だと言えば、下田からの指導が実施上の必須条件であった。河原は当時日本女子教育の第一人者の下田にあこがれて、随時その指導を受ける機会を待ちわびていた。1900(明治33)年の夏、他人の紹介でやっと信越地方に旅行する下田と会って、清国女子教育に従事したいという意思を「つぶさに」伝えた(41)。下田は「深き理解と厚き同情を以て聞き取り」(42)、その後まもなく横浜大同学校に河原を推薦したのである。この学校は清国人経営で、犬養毅が名誉校長であった。これは河原の夢の清国女子教育の第一歩だと言える。ここから河原は下田の設定した対清教育の軌道に乗っていくようになった。

1902(明治35)年に下田歌子は中国大陸での教育活動を開始した。前述した上海の作新社やその出版活動もこの年に始まったが、同じこの年の9月に河原は下田の派遣で呉懷次氏の上海務本女学堂に赴任した。その後の働きぶりは上海総領事の小田切万寿之助の評価も得て、このように上海に一年間余り女子教育の経験をもった河原は川島浪速と日本軍部から望んだ「教育上の経験があって、貞淑温良なる人格を具えて、然も機を見て敏捷に行動する才気と、蒙古の奥地に単身で乗り込む勇氣のある」(43)という条件がすべて揃っていた。少し交渉をしてから、河原は入蒙に応じた。同年の11月に北京に招かれて、12月21日にカラチン王府に到着したのである。そして一週間の準備をして12月28日に育成女学堂の開堂式が行われて、30日から本格的な授業が開始された。ここまで内蒙古カラチン右旗に史上初の女子学堂——毓正学堂が正式に誕生した。

4. おわりに

本稿は毓正学堂の設立に関する日本側の背景を中心に、学堂の教育実態に触れていないが、実は下田歌子は毓正女学堂の設立当時だけでなく、その後の教育実施にも影響をもっていた。結びとしていくつかの事例を挙げて説明するが、1904(明治37)年11月のカラチン王妃から下田宛の書簡(44)に、「ご門下の河原女史」と言っている。また雇聘期限延長について、「何卒先生よりお手紙にてこの事を女史に通ぜられ、私共の希望の達し候ようご高配たわまり度願上候」と頼んでいる。河原操子は下田の弟子であることはカラチン側にまで認められていて、その雇聘期限延長の件も下田の意見が必要だったということはこの手紙から分かるのである。河原は帰国の意があった時にも下田に手紙を出して、意見を聞いていた。河原の在蒙活動は最初から最後まで下田の指導の下にあったと言えるであろう。

実際の教育実施の段階にも下田の影響があった。河原の作った「毓正女学堂規則」の中に、「発達知識健全身体、養高尚之性情、立賢良之基礎」(45)と教育宗旨を定めている。これはまさに下田歌子のいつも唱導した知育、体育、徳育及び良妻賢母の育成という女子教育の理念から由来している。教育内容において、河原は日本語教育を重視し、その理由について「蒙古の女子教育を成るべく日本風に発達せしめて、同地方日

本化の根拠地たらしめんがため、女学堂に於いては特に日本語と日本文字の教授に力をそそぎ、…」(46)と言っている。これは川島浪速の「精神的占領」と共通したもので、当然下田の従来の対中国教育における言語重視の考えとも全く一致しているのである。

さらに1906(明治39)年、河原操子は毓正女学堂の何恵貞、于保貞、金淑貞の三生徒を伴って帰国した。そしてこの三人を下田の実践女学校に入学させた。これらの蒙古女性を受け入れることによって、下田歌子と内蒙古の近代女子教育との直接的なつながりができたのである。三人の中の于保貞は卒業後カラチン地方に戻って崇正学堂で1930年代まで日本語教師をした(47)。これは下田の蒔いた「日の本のまことの種子」が中国に根ざしたもう一つの好例になるであろう。

Received date 2012年7月13日

注

- (1) 「貢王三学」の「三学」とは、1902年から1903年にかけて、貢王によって開設された崇正学堂、守正武学堂、毓正女学堂のことである。
- (2) 中国側の研究は娜琳高娃の「试述蒙古族第一所近代女子学校——毓正女学堂」(『内蒙古师大学报』(4), 1992)、于逢春の「清末内蒙古の教育改革と貢王について——いわゆる「貢王三学」を中心として」(『アジア教育史研究』10, 2001年3月)がある。
- (3) 日本側は片山兵衛の『清末内蒙古王府の教育について——カラチン王府を中心として』(『東洋史論叢：中村治兵衛先生古希記念』刀水書房, 1986)、白岩一彦の「内蒙古における教育の歴史と現状(中)」(『レファレンス』45(4), 1995年6月)がある。
- (4) 下田歌子は1854年に岩村藩(岐阜県)に生まれた。幼名、平尾鉦。祖父は儒者、父は尊王思想をもつ藩士である。下田歌子は幼い時期から学問詩歌を学び、天資聡明な少女として育った。1872年、18歳で宮中に仕出、昭憲皇太后に歌才を認められ、歌子の名を賜った。1879年、御所を下がり、翌年陸客下田猛雄と結婚したが、4年後夫が病死した。1885年に皇后の令旨で華族女学校が設立されると、下田歌子は学監兼教授として就任、以来二十年にわたり華族の教育をし続けた。この間、1893年から二年間、皇女教育や先進国の女子教育視察のためヨーロッパへ行った。帰国後の1898年、上流夫人のみの組織ではない広く一般の婦人も含まれる「帝國

- 婦人協会」を設立，さらに帝国婦人協会より雑誌『日本婦人』を発行し，また1899年に実践女学校を設立した。1907年には学習院女子部（旧華族女学校）を辞職し，大衆の女子教育に専念した。1920年には愛国婦人会会長に就任し，広汎な社会事業を展開する。1936年逝去，享年82歳。
- (5) 岩澤正子「女性の自立と日本語教育—日本語教育史の中の下田歌子」，『実践国文学』第43号，1993年
- (6) 上沼八郎「下田歌子と中国女子留学生——実践女学校「中国留学生部」を中心として」，『実践女子大学文学部紀要』第25集，昭和58年3月
- (7) 故下田校長先生伝記編纂所編『下田歌子先生伝』（大空社），昭和18年10月，P394
- (8) 同上，P9
- (9) 同上，P520
- (10) ，(11) 同上，P702
- (12) 同上，P376
- (13) 「にはのをしへ」，『婦女雑誌』第三巻第五号，明治26
- (14) 岡田照子，小瀬千恵子，三輪聖子（1990年5月）「郷土出身の女子教育者下田歌子に関する研究その（一）」，『岐阜女子大学地域文化研究所報告』第8号，P96
- (15) 上沼八郎前掲論文，P64
- (16) 相原茂樹「近衛篤磨と支那保全論」，『近代日本のアジア観』（岡本幸治編著）ミネルプア書房，1998年5月，P54
- (17) 西郷に殉じた辺見十郎太の息子。
- (18) 前掲『下田歌子先生伝』P426
- (19) 前掲『下田歌子先生伝』P435
- (20) 前掲『下田歌子先生伝』P400
- (21) 前掲『下田歌子先生伝』P427
- (22) 前掲『下田歌子先生伝』P545
- (23) 前掲『下田歌子先生伝』P401
- (24) 小野和子（1972年10月）「下田歌子と服部宇之吉」『朝日ジャーナル』14（40），P36
- (25) 会田勉（昭和11年3月）『川島浪速翁』（文粹閣），P93
- (26) 前掲『川島浪速翁』P95
- (27) 前掲『川島浪速翁』P94
- (28) 河原操子（昭和44年4月）『カラチン王妃と私』（芙蓉書房），P28
- (29) 前掲『川島浪速翁』P89
- (30) 石川半山『肅親王』（警醒社書店）大正5年7

月，P104

- (31) (32) (33) 同上，P105
- (34) 汪国鈞原著，馬希・徐世明校注「校注蒙古紀聞」『赤峰市文史資料選集』7，P23
- (35) 横田素子『内蒙古カラチン右旗学堂生徒の日本留学』アジア民族造形文化研究所，P2
- (36) 黒龍会『東亜先覚志士紀伝（中巻）』（明治百年叢書23）原書房，1966年，P355
- (37) 前掲横田素子論文，P2
- (38) (39) 前掲『東亜先覚志士紀伝（中巻）』P355
- (40) 前掲『カラチン王妃と私』P22
- (41) (42) 前掲『カラチン王妃と私』P105
- (43) 前掲『川島浪速翁』P96
- (44) 前掲『カラチン王妃と私』P263
- (45) 前掲『カラチン王妃と私』P203
- (46) 前掲『カラチン王妃と私』P252
- (47) 馬希（2001年）「日本女教師河原操子来喀喇沁右旗王府教書の内幕」『紅山文史』第8集，中国人民政治協商會議赤峰市紅山区委員会編，内蒙古文化出版社，P102